

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26330411

研究課題名(和文) 英語開講講座支援のための教材と指導モデル開発

研究課題名(英文) Developing teaching materials and practicies for English Medium Instruction

研究代表者

小島 直子 (Kojima, Naoko)

同志社大学・全学共通教養教育センター・助教

研究者番号：80624890

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語による一般及び専門科目(English Medium Instruction, 以下EMI)の現状把握と課題の明確化及び、その解決策を動機づけの視点から探った。まず、EMIの現状把握と課題を予備調査(調査協力者44名)と、本調査(調査協力者220名)の2段階によって明らかにした上で、その結果を踏まえて解決策を探った。予備調査と本調査の結果から、英語教育学的な指導方法が効果的であると考えられたため、英語の授業で学びを促進するために効果的と考えられている指導方法をEMIに取り入れた。そして、その効果を学習者の理解度、自主勉強時間や成績及び学習者心理など様々な要因から検証した。

研究成果の概要(英文)：This project investigated the current states of English Medium Instruction (EMI) at Japanese universities including challenges and suggestions for dealing with these challenges from motivational perspectives. First, we conducted a pilot study with 44 participants and main research with 220 participants in order to understand the situation and Challenges in EMI classrooms in Japan. Findings indicate that teaching practices in language classrooms have the potential to help students understand the lecture and increase motivation in the EMI context. Such teaching practices including small group discussion, interaction with students via an online learning system, and distributing vocabulary sheets were implemented in the study. Then, surveys, some reflection exercise, interviews and grades from the EMI students were collected in order to investigate effectiveness of the teaching practices.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語開講科目 動機づけ 第二言語習得 教育学

1. 研究開始当初の背景

高等教育の国際化の必要性が叫ばれる中、より多くの留学生の受け入れ、海外の研究者のより積極的な受け入れ、そして、より多くの日本人学生を海外に留学させることなどを目的として、英語開講講座 (English Medium Instruction, 以下 EMI) が 2000 年以降、日本の大学で急速に広まっている。特に日本人学生への教育効果として、学生は英語で科目学習を行う過程で自然に必要な英語力が身につく、その語学力と専門性を活かして国際的に活躍できる人材として成長することが期待された。しかし、多くの学生が学期の途中で授業に出席することをやめてしまうことなどが EMI 担当教員から報告され、世界的なトレンドに遅れを取るまいと多くの大学は信頼性の高い実証研究を待たずして EMI を導入し、その開始から 15 年程度経過した今もその効果は明らかになっておらず、現場の教員や学生は混乱している。これらの現状を踏まえ、EMI の現状と問題把握そしてその解決策について探った。

2. 研究の目的

(1) EMI の現状把握と問題の明確化

多くの学生が学期の途中で EMI に来なくなってしまうという EMI 担当教員の報告から、学生は EMI に出席する上で何かしらの心理的な問題を抱えていると考えられる。そのため、学習者心理の視点から、EMI の現状とその問題点を探る。

(2) EMI が抱える問題の解決策の模索

学生が授業に参加することができなくなっている原因を EMI に意欲的に取り組んでいる学生とそうで無い学生の比較から明らかにし、その解決策を探る。そして、その解決策を実際に EMI の教育に取り入れ、その効果を学習者心理の変化や成績、授業視察などの視点から検証する。

3. 研究の方法

(1) EMI の現状把握と問題の明確化

多くの英語教育学における動機づけ研究は英語「の」授業 (語学の授業) で行われており、EMI における動機づけ研究で参考にできるほど信頼性の高いものが見つからなかった。そのため、この目的を達成するために、調査を予備調査と本調査の 2 つの段階に分けて行った。

予備調査

調査対象者

国際関係学の EMI を履修している日本人学生 44 名

予備調査のさらに前に EMI 担当教員 2 名及び EMI 履修学生 1 名へのインタビューを行い、もとに質問紙を作成した。

質問紙の内容は、なぜ EMI を履修しているのか?なぜ、特定の EMI 履修に至ったのか? EMI において、辛い、もうやめたいと思ったことがあるか?それはなぜか?授業がどれほど理解できているか?EMI のためにどれ程自主勉強時間を割いているかなどであった。

更に質問紙実施時に同意が得られた 5 名に対して、インタビューを行い EMI に対する彼らの思いを聞いた。

本調査

調査対象者

EMI を履修している日本人学生 220 名

予備調査の結果を踏まえ、自己決定理論 (Deci & Ryan, 1985) 及び The L2 Motivational Self-System (Dörnyei, 2005) を理論的枠組みとし、EMI 学習意欲、ideal L2 self, ought-to L2 self に加え、英語学習意欲、英語学習態度、科目学習意欲、授業理解度、自主学習時間などを聞いた。項目は英語教育学の先行研究で使用されてきたものを EMI 環境に応用した。質問紙調査に加え、質問紙実施時に同意の得られた学生 11 名に対して、インタビューを実施し、彼らの EMI に対する態度や履修時の学習意欲の変化などについて語ってもらった。また、このインタビューは EMI 学習意欲の傾向が異なる学生を選択し、より多角的な視野から EMI 履修生の経験を理解しようと試みた。

(2) EMI が抱える問題の解決策の模索

介入調査

調査対象者

教育介入を実施した EMI を履修している日本人学生 54 名 (Gender Studies) と 21 名 (Cultural Studies)

そのうち、事前事後両方に回答した学生は 38 名 (Gender Studies) と 18 名 (Cultural Studies)

「(1) EMI の現状把握と問題の明確化」で行った調査結果をもとに、英語教育学的視点から EMI 学習意欲を維持と向上を目的とした指導方法を提案し、その効果の検証を行った。この調査は、研究分担者である井口氏が担当する Gender Studies と Cultural Studies の EMI で実施した。両クラスとも留学生との共修であり、週 2 時間、7 週間に渡って開講された。Gender Studies は 250 名中 60 名程度が、Cultural Studies は 120 名中 40 名程度が日本人学生であった。1st クォーターに開講された Gender Studies には、1 名のベトナム人の TA がおり、井口氏と研究代表者である小島の 3 名で教育介入及び調査を行った。2nd クォーターに開講された Cultural Studies はベトナム人の TA2 名、日本人の TA2 名、計 4 名の TA が

おり、井口氏、小島と合わせて6名で教育介入及び調査を行った。

具体的な介入は以下の通りである。

Gender Studies

- A. 日本人学生1名+留学生3名、合わせて4人グループの作成
- B. 各グループの座る位置を示した座席表の作成
- C. オンラインラーニングシステムの使い方の説明セッション及び説明のためのビデオ作成
- D. オンラインラーニングシステムによる授業理解度チェックなどの授業支援(英語)
- E. 中間テスト後の学生による教員に対するフィードバックセッション
- F. 言語教員とTAの期末試験対策講座
- G. 英語(外国語)でのリーディングスキルについてのセッション

Cultural Studies

- Gender StudiesにおけるA—F
- H. 言語教員作成による語彙分析及び重要語彙シートの作成及び配布
- I. 日本人学生のみを対象とした、日本語によるオンラインラーニングシステムによる授業支援
- J. グループワークの意義

データ収集は、事前事後の質問紙に加えて、EMI担当教員である井口氏へのインタビュー、質問紙実施に同意の得られた学生6名へのインタビュー、学習状況を把握するためのリフレクションシート、学生から教員に対するフィードバックセッション、研究代表者の継続的な授業視察中の観察ノートなど量的及び質的データを収集した。

質問紙の項目は、「(1)EMIの現状把握と問題の明確化」の本調査で使用したものを中心に、英語学習と科目学習のどちらをより重視してEMIを履修しているかなど、数項目の修正・追加を行った。

EMI担当教員間の情報共有会

本プロジェクトの結果と実績の共有に加えて、他のEMI担当教員からも学び、協働で解決策を模索することを目的として、2017年3月にEMI担当教員3名、英語教員(本研究代表者)1名で情報共有会を実施した。今まで担当したEMIのシラバスや授業計画、授業内資料などを共有した。さらに、英語教員からみたEMIと科目担当教員から見たEMI、理系EMIと文系EMI、少人数EMIと大規模EMI、異なる大学におけるEMIとその取り組みや役割の違いなどについて話し合い、EMIの複雑な現状を共有しながら、期待されている「EMIの効果」とは一体何か、何を目標に現場の教員はEMIにおける指導を行って行く

べきかなどについても議論した。

4. 研究成果

(1)EMIの現状把握と問題の明確化

予備調査

この調査では、EMIの授業の半分程度しか学生は理解できていないこと、多くの学生は「卒業必須単位のため」といったような非常に自己決定度の低いEMI学習意欲を持っていること、そしてEMI全体に対する学習意欲は英語学習意欲と科目学習意欲によって構成されていることが示唆された。

本調査

この調査では、EMI学習意欲は英語学習意欲と科目学習意欲で構成されており、英語学習意欲の方がより強くEMI学習意欲に影響を与えていることがわかった。特に英語学習意欲の中でも、英語を使っているなりたい自分を明確に描けているかどうかEMI学習意欲に影響を与えていることがわかった。更に学習意欲の高い学生と低い学生の学習意欲の傾向の違いを分析したところ、EMIが将来の目標(仕事や留学)に近づくための重要なステップと考えているかどうか重要であることが浮かび上がってきた。学習意欲の高い学生は、授業中、授業における有能感、理解度も高く、自主勉強時間も長いことも明らかとなった。これらの結果を踏まえると、EMIの学習意欲は彼らの将来就きたい職業、留学などにとってEMIを履修することがどのような役割を持っているのか(または持っていないのか)によって左右されると考えられる。

(2)EMIが抱える問題の解決策の模索

介入調査

量的研究からは、事前・事後調査において有意な効果は明らかとならなかった。Cultural Studiesにおいては、授業が理解できているという有能感が有意に下がってしまったことが明らかになった。

質的研究では日本人学生をクラスの一部として扱ってくれたことに対する感謝、日本人学生のTAがいたことに対する安心感など肯定的な評価が報告された。特に期末試験対策に対しては、今までに無い取り組みで他の授業でも取り入れて欲しいという意見が報告された。また、指定グループによるディスカッションにより、自分から留学生に話しかけることが難しかった学生も英語を使って留学生とディスカッションすることが可能となったことがわかった。加えて、オンラインラーニングシステムの活用で、日本人学生のEMIにおける強い孤独感、不安感を減少させ、学習意欲維持につながったことがわかった。教員に対するインタビューからは、Cultural Studiesにおける日本人学生の試験結果は、昨年度までと比較して良かったこと、成績も日本人学生と留学生の差が縮まったことが報告された。

その一方で、席を指定することによって、場所によっては黒板が非常に見えづらいこと、オンラインラーニングシステムは個人の投稿が履修者全員に見えてしまうため、他の学生の回答を丸写しする学生が多いこと、語彙シートの語彙の多さ、もっと積極的な日本語使用への要求など、まだまだ、多くの改善が必要であることが示唆されるとともに、量的データから学習意欲の向上が見られなかった結果を裏付けしていると考えられる。さらに、今回の介入調査では、EMIにおける教員に対する期待の複雑さが浮き彫りとなってきた。具体的には卒業必須単位がとにかく欲しい学生から、大学における学びの集大成として学ぶ楽しさを求める学生まで非常に多様な理由で学生はEMIを履修しているため、教員に求める授業内容も多岐にわたっていることが示唆された。現在は、クォーター中のEMIに対する学習意欲の変化が異なる学生7名のインタビューで得られた質的データを使って、彼らの相違点について明らかにするため、分析を進めている。

限界点と今後の研究について

まず、介入調査における量的データの少なさが本プロジェクトの限界点として挙げられる。また、EMIは科目内容や授業のサイズ、学習環境などが多様で、いかなる教育環境においても応用可能かつ具体的な指導方法の提案には至っておらず、今後も介入調査を積み重ねていくことが必要である。

EMI担当教員間の情報共有会

特にデータ収集は行っていないが、参加した教員からは今後もこのような集まりがあれば積極的に参加したいというような肯定的な評価を頂いた。今後は規模も広げながら定期的に実施していきたい。

5. 主な発表論文等

本調査

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

1. Kojima, N., & Yashima, T. (2017). Motivation in English Medium Instruction Classrooms From the Perspective of Self-determination Theory and the Ideal Self, *The JACET Journal* 62, pp.23-39 (査読有)
2. 小島直子 (2016). 英語による学修(EMI)の現状—EMI準備講座の動機づけ調査から—, 同志社大学学習支援・教

育開発センター年報第 7 号, pp.25-41.

(査読有)

3. 丸田祥一・和泉絵美・小島直子 (2016). “Intensive Courses for TOEFL”の取り組み, 同志社大学学習支援・教育開発センター年報第 7 号, pp.76-88. (査読有)
4. Hamciuc, M., Sato, Y., & Kojima, N. (2015). Teaching Japanese Foreign Policy to Japanese Students in English, *Teaching for Tomorrow Today*, pp.69-77. (査読有)

〔学会発表〕(計 7 件)

1. Hamciuc, M. (2017/03/10). EMI Teacher Self-Access Training Course Development, Tesol Arabia 2017, The Ritz Carlton, Dubai UAE
2. Kojima, N. (2016/11/26). Student Motivation & Challenges in EMI Lectures, *42nd Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition*, Aichi, Nagoya, WINC Aichi.
3. 小島直子 (2016/10/23) English as a Medium of Instruction における動機づけと効果的な指導方法の模索について, 動機付け研究会, 大阪府, 豊中市, 大阪大学
4. 小島直子・八島智子 (2016/8/8) 自己決定理論と The L2 Motivational Self System の視点から見た英語開講講座における動機づけ, 外国語教育メディア学会, 第 56 回全国大会, 東京都, 早稲田大学
5. Sevigny, P., Sato, Y., Kojima, N., Hamciuc, M., Horie, M., & Walker, L (2015/ 11/8). The meaning of bridge program in university EMI

contexts, Asia Pacific Conference, Oita,
Beppu, Ritsumeikan Asia Pacific University.

6. Sato, Y., & Kojima, N. (2014/11/1).
Teaching Japanese foreign policy to
Japanese students in English, *Symposium
on Postdoctoral Career Development in
Japanese Studies and Undergraduate
Education in English at Japanese
Universities*, Tokyo, The University of
Tokyo.
7. 佐藤洋一郎・信田智人(2014/11/16)日本
の国際政治学を考える-日本における国
際政治学教育のあり方-英語授業の可能
性と限界, 日本政治学会, 福岡県, 福
岡市, 福岡国際会議場

6. 研究組織

(1)研究代表者

小島 直子 (KOJIMA NAOKO)

同志社大学・全学共通教養教育センター・助
教

研究者番号：80624890

(2)研究分担者

モニカ・ハムチュック

(HAMCIUC MONICA)

宮崎国際大学・国際教養学部・講師

研究者番号：70721124

佐藤 洋一郎 (SATO YOICHIRO)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学
部・教授

研究者番号：90569782

井口 由布 (IGUCHI YUFU)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学
部・教授

研究者番号：80412815